

アンサンブル・スタジオ

「ティベット・ライズ・アートセンター」

設計=アンサンブル・スタジオ/

アントン・ガルシア=アプリル、デボラ・メサ

アンサンブル・スタジオ:

ランドスケープの構造、ティベット・ライズ

撮影=イヴァン・バーン

参照 | 本誌 pp.3-19

2015年から2016年にかけて、アンサンブル・スタジオのアントン・ガルシア=アプリルとデボラ・メサは、今回取り上げるティベット・ライズ・アートセンターに3つの構造物を実現した。「Beartooth Portal(熊の歯の門)」、「Inverted Portal(逆さの門)」、「Domo(ドーム)」の3作品は、標高の高い地点にそれぞれ距離をおいて配置された。彼らは同じ技術を使って、これらを建てている。まず人工の基壇のうえに、これら構造物の接地面の輪郭を描く。その内側を掘削し

てできた円錐形の内部に、土壌と接着させてコンクリート打設用の骨組を組む。その組立てが終わったら一度骨組を外し、土の表面をプラスチック・シートで覆い、その上から2つめの、意図的にピンと張らずに皺のよったシートを重ねる。表面を覆われた掘削部の内側に、先ほどの骨組を戻し、コンクリートを打設する。こうして得られたヴォリュームを、型枠として使われた掘削部から引き揚げる。「熊の歯の門」と「逆さの門」に関しては、それぞれ2つの



「ドーム」での演奏会



「ドーム」: 全景



「ドーム」: 見上げ



「ドーム」の建設プロセス



「熊の歯の門」: 遠景



「熊の歯の門」: 近景



「逆さの門」: 遠景



「逆さの門」: 近景

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2021 Arnoldo Mondadori Editore
©2021 Architects Studio Japan

バ ロ ッ ツ ィ / ベ イ ガ

テファン・タラスニク、パトリック・ドハティ、フランシス・ケレに依頼した他の作品、風景に溶け合う彫刻を鑑賞することができる。1965年にアレキサンダー・カルダーが構想し、今は「オリヴァー・バーン」から遠くない場所に置かれた「Two Discs(2枚の円盤)」で起きたように、これらの彫刻作品も音楽演奏を迎え入れる、より正確には音楽演奏に寄り添っている。同じことは、2013年にティベット・ライズを訪問後にアントン・ガルシア=アブリルとデボラ・メサが同地に建てた「ランドスケープの構造」群にも当てはまる。彼らが実現した構造物は、「Beartooth Portal(熊の歯の門)」(Beartoothグループとのアルバム「Disgusting」を2014年に出したカレブ・ショモへのオマージュか?)、「Inverted Portal(逆さの門)」、「Domo(ドーム)」である。パシユエの説明によると、それぞれ異なる音質をもっており、それは多様な形態や建設に使われたコンクリート素材の仕上げから生まれる凸状部の戯れと反響音に由来する。ラディカルなまでに両義的な物体である3つの「彫刻」は、近づく経路を変えるたびに、これらを迎え入れる風景のヴォイドの中に絶え間なく変化する輪郭としてくっきりと姿を現す。方向性を持たず捉えようのない動きを帯びた目的地たる3つの構造物は、多声性/多義性をもつ。それは建設に使われた原初的フォルムによって、恣意性と偶然性の絡まる中で単一の静力学的原理に異なる外見を与えていることに由来するだけでなく、そこで上演されるバランスの遊戯に役立てられるコンクリートの塊の処理によって、周囲の風景を舞台に変身させることから生じている。この成果を生んだモデリング作業の狙いは、ゆっくりとした自然の浸食作用によって大地から姿を現す岩石の凝固物によく似た外観を与えることだった。その目的は、突出物のない風景に視覚的なゴールを設置することにある。構造物はその見た目にもかかわらず、むしろ正確に言えば、計算された幾何学形態と、フォルムの実現に使われた幻想的なまでに原始的な素材とが醸し出す人工的両義性によって、次のことをわれわれに思い出させてくれる。芸術を大地の遺産あるいは風景のオーナメントと見なすのは単なるクリシェであり、凡庸なものは無知な目を慰めることしかできないということを——ティベット・ライズで得られる経験がわれわれに教えてくれるように

「タンツハウス・チューリヒ」

設計=バロツィ/ベイガ:ファブリツィオ・バロツィ、

アルベルト・ベイガ

原初的革新性 カミッロ・マーニ

参照 | 本誌 pp.24-39

チューリヒの新タンツハウスは、ダンス・アカデミーとスイス・テキスタイル学校があった市有の建物が2012年に火事で破壊されて再建が必要となり、その2年後に開かれた国際設計競技でバロツィ/ベイガが優勝したことから誕生した。

このプロジェクトは多くの点で、すなわち設置方法の巧みさゆえに、作品が表現する都市的価値ゆえに、建物のクオリティゆえに、そして実験を恐れない勇気ゆえに、驚くべき事業である。そこで最も衝撃的なのは、建築設計を支配するわずかな身振りの持つ剥き出しの本質性と率直な明瞭さである。

まず、場所である。新しいタンツハウスは、かつて工場地帯だった地区のリマト川の川べりに建っている。そこではチューリヒ旧市街の華やかな街並みが消え、代わりに異なる時代に建てられた大規模な工場建築、タンツハウ

スの計画エリアと接する鉄橋といった道路整備関連インフラストラクチャー、川岸に横たわる歴史ある木造プールのような余暇施設からなる、非均質的な街並みが現れる。土手に沿って植物が自然に生い茂り、川沿いの市街地の間へと広がる。チューリヒのような大都市にはそぐわない環境であり、非公式と言ってもよい場所である。そこに通う人々も場の特異さを表現しているようで、水着姿の若者たちが鉄のトラス橋から川に飛び込む傍で、労働者や新興の企業家たちが川沿いをそぞろ歩いている。

バロツィ/ベイガは、2つの戦略を用いてこの場の特性をつかみ取ることに成功した。1つめは設置の原理である。建物は立地環境に従い、このエリアの都市的価値を強化する手段に変身している。ヴォリュームを川から数mほどセットバックして配置し、公共の歩道を新しく通す空間が確保された。新しい歩道は既存の遊歩道と連絡しており、ダンス学校の複数の出入口を車道から川側に移すことでさらに活用されている。これは地形学的なプロジェクトで、建物は基壇と化し、その上方に位置する既存建築群が新たな意味を帯びる。2枚の鉄筋コンクリートの壁により主要なフロアが規定されている。上階では、陸屋根が公園に変身し、そこから周囲の歴史的建造物を眺めることができる。一方、下階は川べりの自然環境に囲



川越しに見る全景

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2021 Arnoldo Mondadori Editore
©2021 Architects Studio Japan

ヘルツォーク&ド・ムーロン

「メレット・オープンハイム・タワー」

設計=ヘルツォーク&ド・ムーロン

建築要素の威信 マルコ・ピアージ

参照 | 本誌pp.60-69

回顧主義者、純化論者、唯美主義者、秩序と統一性の信奉者たちは失望するだろうが、近代都市の突出した、おそらく避けて通れない特徴のひとつは、1800年代以降、すなわち都市計画と建築デザインが、一般的な政治目的に空間を適合させる作業と見なされるのを止めて個人のイニシアチブの道具になり、生産と交換のメカニズムがますます国を越えるものになり始めて以後、近代都市の複雑で雑多で一貫性のない形態学であることは確かであろう。これはまったく異なる歴史過程、文化的ロジック、経済的・社会的力学に関わる言語と造形が混ざり合い、堆積した結果である。コーリン・ロウが述べたように、現代のメトロポリスが形成され変容する過程において、「相対立するモデルが並ぶ」「ハドリアヌス帝別荘(ヴィラ・アドリアーナ)」のモデルは、「全体として秩序よく配列された広がり」のユートピアと見なされた「ヴェルサイユ」モデルの地位を最終的に奪った。しまいには、主流をなす趣向や感性が、現代の都市景観の生理的な習い性となった対立、複雑さ、矛盾にすっかりなじんでしまうまでになった。

その後、インフラストラクチャーの結節点と機械化された公共輸送機関のネットワークは、歴史的に見れば、古

代都市の伝統的秩序を侵犯する最初の諸要素のひとつとなり、アントニオ・サンテリアを嚆矢とする、夢想的ヴィジョンをもつ「新しき都市」の図像学を決める孵化装置のひとつとなった。現に、それ以来の空港、駅、高速道路などは、生来的に両義的で治外法権的な規則を持つ場と施設となり、「進歩主義的」建築家たちは、もはや過去やゲニウス・ロキの名残もない、技術的比率に基づき調整された革新的フォルムのコードの実演を行う訓練場を、プログラム通りに解釈してきた。エツィオ・ボンファンティ(1937-73、イタリアの建築家)が当時の見事な決まり文句で「技術の表象」と呼んだものは、さまざまに変化しながらも、今日の設計に関わる想像力の重要かつ堅固な靈感源であり続けている。

バーゼルの鉄道駅の縁にヘルツォーク&ド・ムーロン事務所が完成させたばかりの、メレット・オープンハイムに捧げた高層集合住宅もまた、この意味論的地平に組み込まれている。現にこの建築は、近くの旧市街に並ぶブルジョワ的建築を見ているわけでも、流行のグンデリ地区を見渡す中低密度の住宅地の家庭的雰囲気を目指しているわけでもなく、貨物駅の風景と調和している。そのため、無味乾燥で、厳格な、構成の単純さと素材の画一性の点でよそよそしく思えるような造形が選ばれた。

この建物は、スイス連邦鉄道(SBB)が所有するズードパルク(南公園)と呼ばれるエリアを対象とする不動産再開発計画の一環で、設計競技を経て2002年にスイスの名高い建築設計事務所が第1等に選ばれた。設計競



1階ホール



絵画スタジオ

作品:ウィンター視覚芸術センター/フランクリン&マーシャル・カレッジ

設計:ステイーヴン・ホール・アーキテクト

設計チーム:ステイーヴン・ホール(デザイン・アーキテクト、主宰);

Chris McVoy(担当パートナー);

Garrick Ambrose(プロジェクト・アーキテクト、シニア・アソシエート);

Carolina Cohen Freue(プロジェクト・アーキテクト補佐); Dominik Sigg,

Marcus Carter, Elise Riley, Michael Haddy, Hannah LaSota

プロジェクト・マネージャー:Casali Group, Inc.;

Thomas Murray Franklin & Marshall College: Sheldon Wenger

構造:Silman | エネルギー効率:ICOR Associates

設備:David Miller Associates, Transsolar(空調)

コンサルタント:Knippers Helbig Advanced Engineering(ファサード),

L'Observatoire International(照明),

Harvey Marshall Berling Associates(音響),

Aqua Design International(人工池)

ランドスケープ:Hollander Design

建築主:Franklin & Marshall College

スケジュール:設計・施工 2018-20年 | 規模:延床面積 3,066m²

所在地:Lancaster, Pennsylvania, U.S.A.



右にメレット・オープンハイム・タワー、左に2012年完成の東側ブロックを見る

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2021 Arnoldo Mondadori Editore
©2021 Architects Studio Japan



空からの全景



東側ファサード



北側の温泉エリア

さわしい引き算のプロセスを推し進めた。つまり、時とともにそこに層をなして空間の認識を不可能にしていた堆積物、ゴミ、泥を取り除いた。旧採石場の空間の居住可能性と健全さは、天井に穴を開け、トップライトから空気と光を採掘場の奥へと引き入れることによって、また、スチールの枠に不透明な布でできた膜を張り、建具として機能させることで、格段に向上した。この隔膜は走査線のような矩形の織目によって、鑿や鑿で打ち削った採石場の壁面のテクスチャーを想起させる。建具は当初、完全に透明とされ風景に向けて開く計画であったが、すぐさま重

要な変更がなされ、屋外の眺めよりもさらなる内向性と抽象化が優先された。不透明な膜の特性を利用して、地中海の強い光を徐々に拡散させ、屋内の微小気候を調整することで、一種の生物気象学的建築に変えた。家具調度も、数を極力減らし、必要性和軽さの基準に答えている。多くの場合、採石作業の結果としてできた空間によって、家具の配置が決定された。

スペインの建築設計事務所が新たに実現した住宅は、全面的に、また再び、実験的な場という意味合いを帯びている。一種の研究室となったこの住宅は、熟考し計

画するために活用されることになった。巨大な石塊でできた空間は、既存のものにあまり付け加えないという意味で非常に身軽である。放置された空間を、環境への負荷を最小限に減らし、地球への感受性をもって再利用することについての教えと言えよう。

【注】

1——プラトン『国家』、7巻 | 邦訳書：藤沢令夫訳、岩波書店、1979年

2——アントン・ガルシア=アブリルへのインタビューは、アンサンブル・スタジオ作品をより深く掘り下げた近年のモノグラフから引用した。一読を勧めたい。Antonello Marotta, *Ensamble Studio*, LetteraVentidue Edizioni, Siracusa 2019, pp.26-27.

作品：カン・テッラ（メノルカ島の住宅）

設計：アンサンブル・スタジオ / アントン・ガルシア=アブリル、デボラ・メサ

協働者：Javier Cuesta, Borja Soriano, Alvaro Catalan,

Massimo Loia, Marco Antrodocchia, Sebastián Zapata,

Arianna Sebastiani, Claudia Armas, Ekam Sahni, Yu-Ting Li,

Joel Kim, Gonzalo Peña, Yvonne Asimwe, Mónica Acosta,

Gabriele Marinello

コンサルタント：Urculo Engineering

規模：居住エリア 600m² / 温泉エリア 530m² / ボルティコ 550m²

スケジュール：設計 2017-19年 / 施工 2018-20年

所在地：Mahón, Menorca, Islas Balears, Spain



メイン・ホール：奥に温泉エリアを見る



温泉エリア：右に暖炉を見る



映写エリア



温泉エリア：屋外プール



同左：植物とトップライトを見る



個室エリア

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2021 Arnoldo Mondadori Editore
©2021 Architects Studio Japan